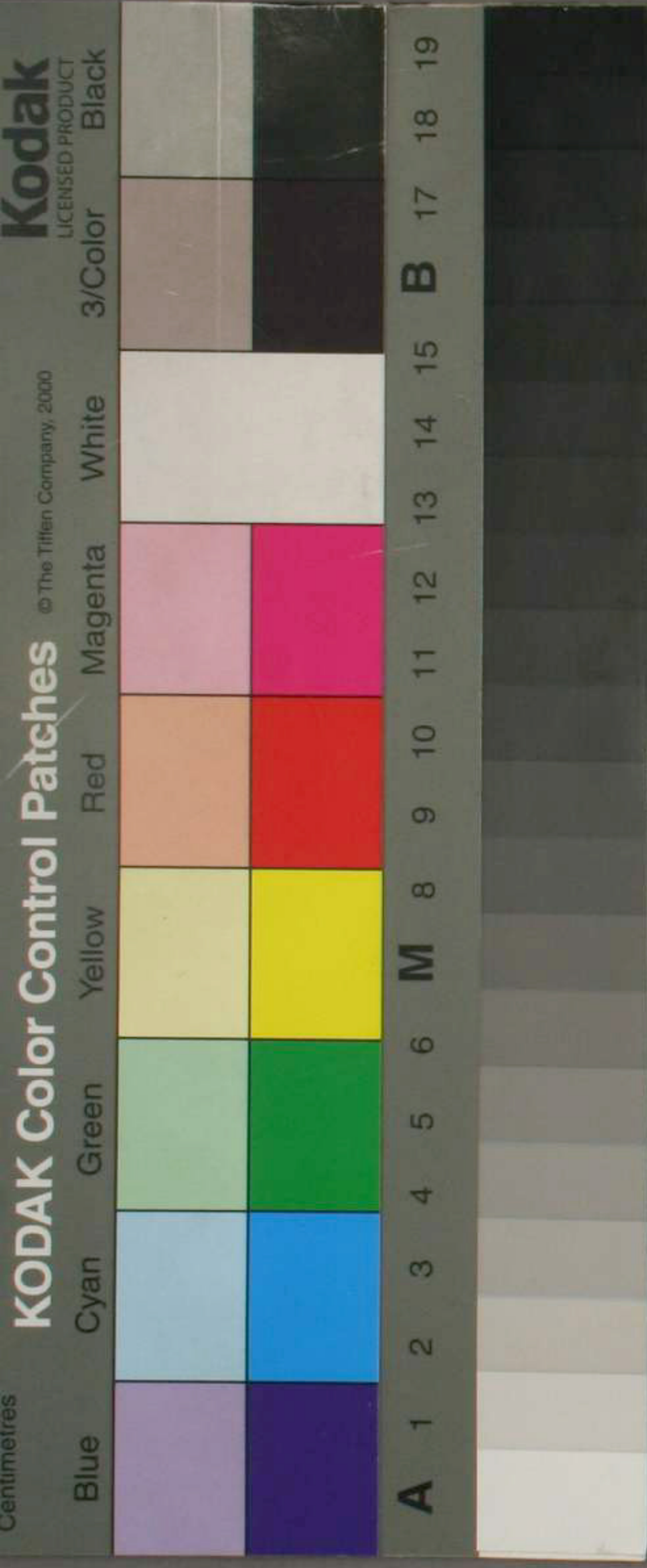




攝津名所圖會

下 矢田部郡

讀
館
用
風

3651
11
JL 4




 藤原



春泉


門凡
 號 3651
 卷 11

昭和
 九月廿三日
 東京

長田社

彩吉
 信光
 花の
 小
 林の
 小
 白河院
 小



明泉寺



けさの勝本原所
いふをどし

高市黒人

類字和合集小真堂ハ大和國とありふたゞ契沖ハ吐懷編小曰ハヤ
あつたわへるくの前ハ万葉集廿三小あり高市黒人の前二首の
内へ上小ハ白菅のまのちたふやくうそ君あやみめぬのちた
うとわれハはの國へ又ふわへるくといふみしやゆへあふ思ふ
あつたれうちたうへ藤原とまうそこのふつあふはゆへ小貴
七小あふのうとふハ白菅の真世の藤原ハあふめあふね家々衣
あふとる藤原日本紀藤原衣と有く皮衣ゆりくは具た
用らうともの

屍體村の山上街道の南側ふあり
 の山もありしり享保年中並に氏捨澤

志編集の時あに巡りし如この此石表の成立く父に代り討死し
其美名と賞し西海道の還の酬今の地に移り埋木の
人小家は監お太帝と共に其
忠孝と嘆せしらんをるくとぞ
平家物語三

八十四

追ふ旗を頸の骨と兵ど射て馬より倒ふ射落し其の中の大將と

加^{とく}章^{めい}父^{ちち}と討^うせどと中^{なかつ}ふ隔^{へだ}たり押^お雙^{ふた}無^むふと組^{くみ}てどうと落^お取^とく

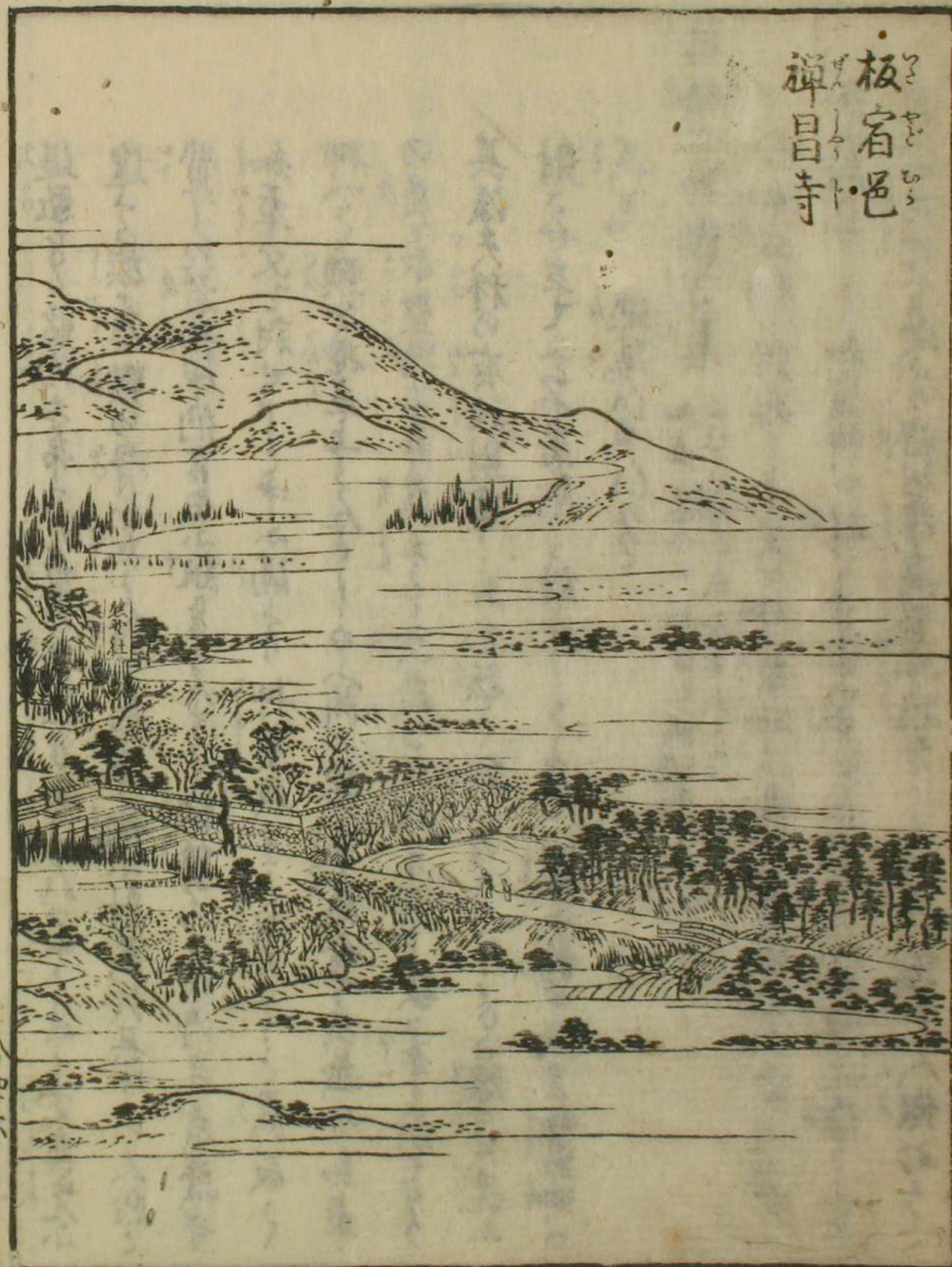
の肩と取鹽物を帛落糸を武藏書紙討まう一歌う糸も討てず

射さるゝ上らで居ながら討死し々々い
終ふ新中納言如盛卿さくら
いふわうとぞ

太郎頼方墓
加草墓の山街道の側畑の中あり

不討死しと知盛卿と扶く平家の中ふもあまの英雄ハ又飛が上に

んやたはふふる齊の華周晋々推かごと同日の論の人傑なり



板宿邑
禪昌寺

知章墓の山ふもとに又平塚あり盛衰記
云然者三後通盛へ後川の夢ありにち

られ、本村源三成郷と組む討ちをいしに足るうり
 平家お沿小通盛卿の山のもれ又將軍うくおろしうり
 其智略あましく討死せられしと兄少小宰相局の辰ふ君は
 今日湊川うく討ちをせられぬと告ぐる事なごうり松澤志
 小曰平通盛墓佐比江堤の東北ふありと若は今其地と
 るふふさごうありて予これと按ふ只平家お沿の文にうり
 やれうりとある初めゆひむう湊川の山の麓とあり
 ぐりく尻村の東小流く海ふ入より移れへ通盛郷の
 墓も佐比江ありあり河け所ありや一程くむう考へ
 これを此地の事なりとぞうかき

去歲より作斷計ぬふり
日本紀長田國と名り

長田村小まゝ延園街道の北側ふる居ありあれより左右並ね
式町計ありと老田の民家と行く本社に至り

延喜式曰名神太月吹相掌新嘗御祭八月十日
長田為代東尻池為尻池使田為須廣二方村

二卷本
社
末社
松庵五郎次郎
出雲大社社

小所遺風
のまゝ
石燈籠
お殿の石小わうむう
村上天皇の御所附

事代主神功皇后神功皇后之云曰神功皇后祠神功皇后章神功皇后御心神功皇后長田神功皇后國神功皇后則以神功皇后葉山神功皇后媛之弟神功皇后

長媛令示云 三代實錄云 奉授長田神從五位上云

長田村の奥より大馬山と稱せしやうへに如藍親々う

り基の他長尺計初ふふ空應わ
子小活人紋に

古田村名倉池の傍あり
古松を株あり

越中系司盛俊の山のふれ侍大將や在りたるが今も落共叶へり
 とや思ふにむく欲と待たぬ猪俣小平六則細好欲や目次やけ
 鞭登と令く馳奔り押雙く無ふと細くさうと落猪俣と八
 箇國小圓へうと健者之鹿角の一二の草折とと轍く引裂々々を

園一城中若司も人目多し二十人か力能きといふも内々六七
人上下を船と只そ人七推上推下を程の大力これ猪俣
と取く押く初うさ猪俣下ふ卧かぐ刀を抜うとそれと猪俣
役さう刀の柄と握るふも及ばぬ云うとそれと能く強
押らうと聲も出たそれと猪俣は又剛の者さうあうそれと
の息が休く欲の頸を捕とりて我も名を聞く聞せ欲も名を
せく頸取たれはあそ大功あれ名も知ぬ頸取て何あやうと
と云々れを城中若司實もと思ひたん本へ平家の一門たり
身不肖あるふ依く當時侍かそれと城中若司盛俊といふ者
和後何者ぞ名を聞て云々れは武藏國住人猪俣小平六則綱
といふ者之今我令助を望ませ候や中邊の一門何十人
望よ今度の勲功の賞を申替て中令計とは助けさうんと之を
城中若司大に怒り盛俊身不肖かとも流石平家乃一門

あり盛俊源氏と憑くと思ひよう源氏も亦盛俊に憑れ
とも思ひ思ひ下惡君を申振哉とく既ふ頸とやんとこれ
を正あう候隙人の頸を捕や有と云々れは更だ助らん
たり堅田の畠に據あうは後水田のあも源ううあは壞乃
上ふ二人か腰歩懸く息を居り良の河に緋威の鎧
着く月もある馬ふ金覆輪の鞍並く乗ううは武者一騎
鞭を令せく馳走は城中若司性氣ふんたれはあれ猪俣
小親う候人見四郎で候が則綱が有候えと猪俣と賢候若
も候ぬと云ふうそれと進付程あう細んどうりのとあ合ぬ
事ふようあうと思ひ待所ふ交一段計ふ馳走は城中若司
初ふ兩人の款と一目つ見たるが以て進付款とハタ守て
則綱と見えぬ猪俣力足は踏立上り巻を強揚り盛俊
が鎧の胸板とグツト突て後ハツケふ突倒に起上らんや

乃今至る木の下にけが宿とせむ花よこよみのわづらひを

はく波や志質の都へあきしと昔かゝれ山さへ我

江山天暮宿誰家客少芳菲棲亂鴉
龍去六軍行幸日歌成千載故鄉花
無邊風雨摧瓊樹一汀春雲捲赤霞

菅神飛松
板宿村の山頭あり菅公筑紫一教あり耐邪よりうき飛来し
タるとを倭小太夫宮八幡宮の社あり此地の生土神也

禪宗源流

本尊聖觀音

長安河派の計

南基正續大祖禪師

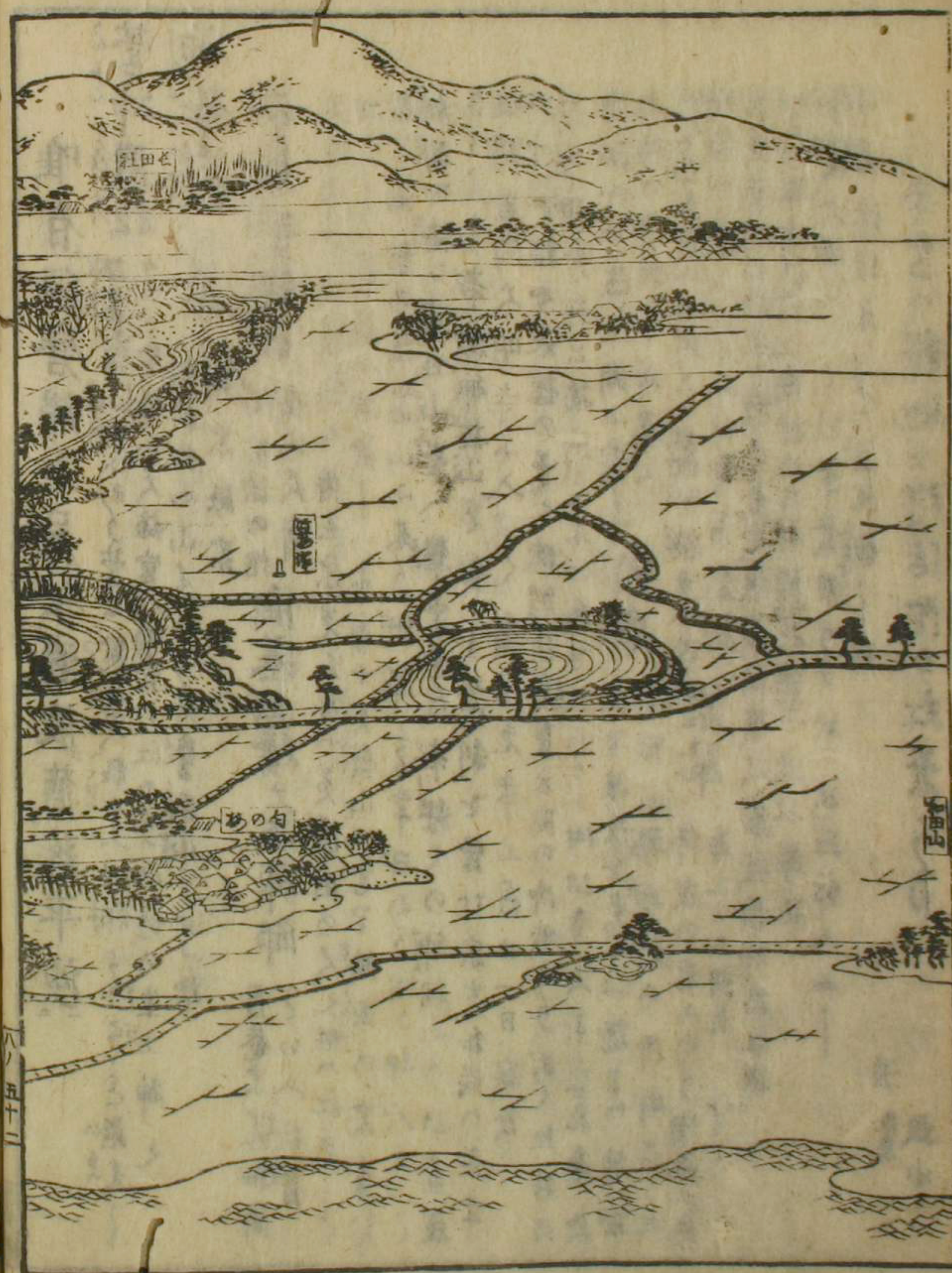
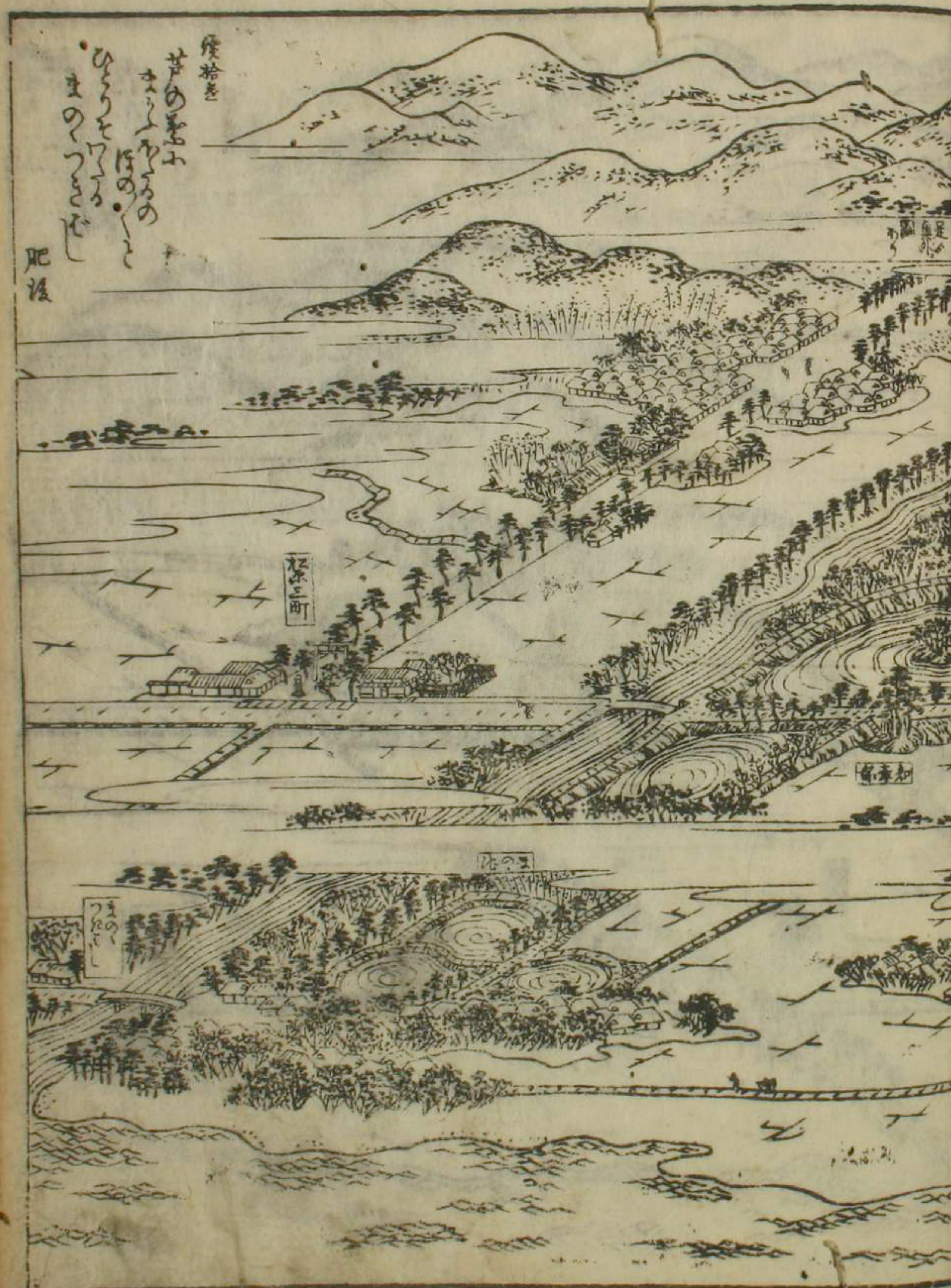
月菴宗光あきみつ和清わきよ
とゆふゆふ往むかひ着き

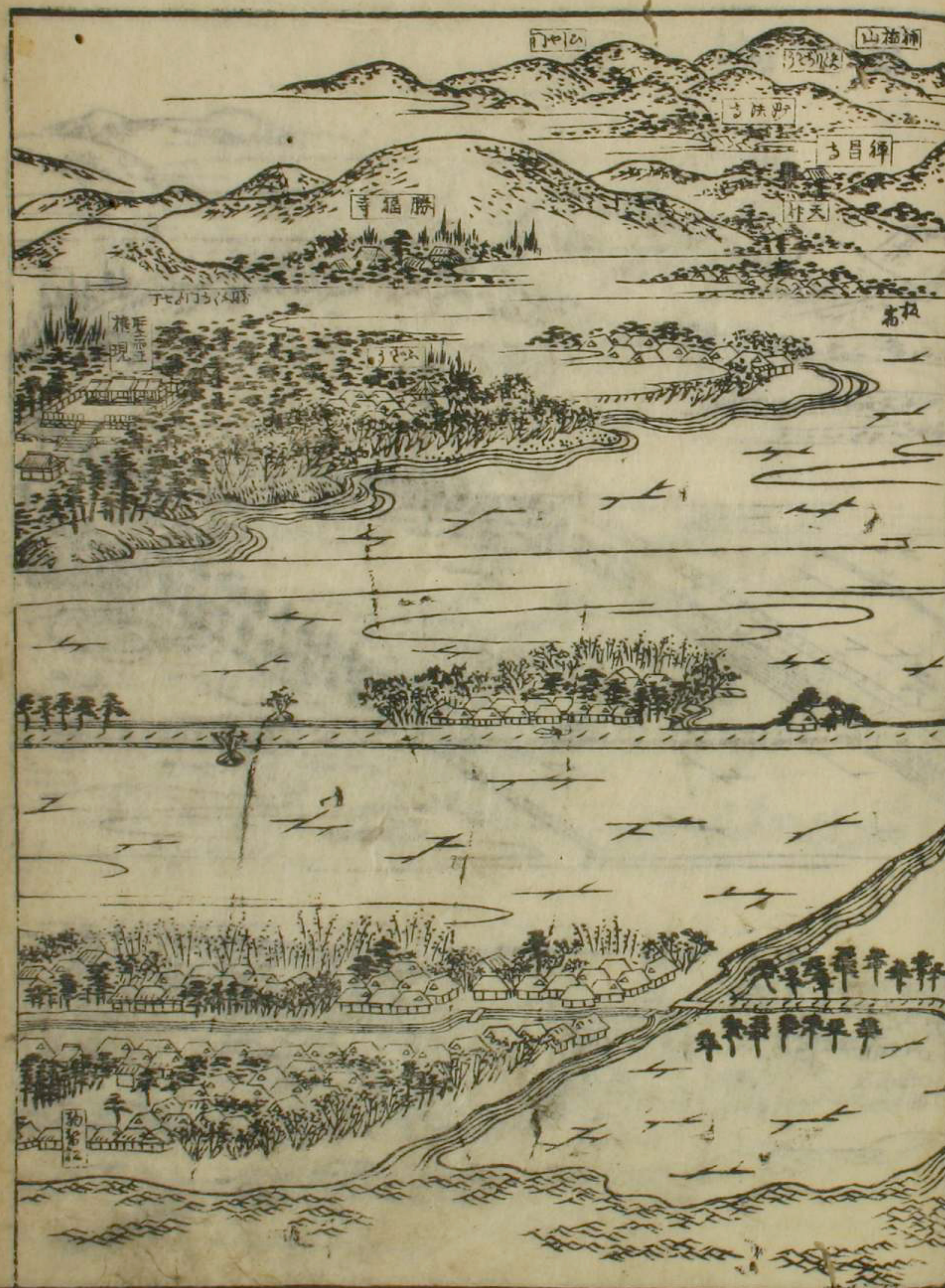
延文中中の某創之傳云宗光和尚は濃國の人、姓ハ江氏、幼少より夢見小蓮身、一丰居士、其壁山へ宅を隱居、授け瑞朝の後、山小あり、聖澤を奉じ、日あり、樹小、神人來り、顔面と接する、翌日山夢へ攀宅を奉じ、奉じ釋天の神祠あり、け、重現ありんと、奉釋神接山と號し、澤刹を營む、宗光和尚ハ老年但別黒門大明寺ふ入り、衆應元丰二月廿一日寂歿、
方丈画 持世永徳の著、之賦別伏見豐太岡の所、城よりあぐに移、所治世の、後上岡小達し、
鎮守 慈覺權現とある一説あり、神功再興の所、教者、其賜ふ、
皇太后、韓師朝の所、時、く、
至り、石片ふあり、巖と接する、故、
神接山といふ、く、ふ、神、
呂氏春秋曰、桂之一種也、叢生巖嶺間、謂之巖桂、俗呼為木犀、
南方草木狀曰、江南桂、八九月開、花無子、此木犀也、
丹楓 遠近來り、く、圓、
秋の末、紅錦の如し、

奉爲ハ釋迦ノ阿彌陀ノ紅葉ノ南

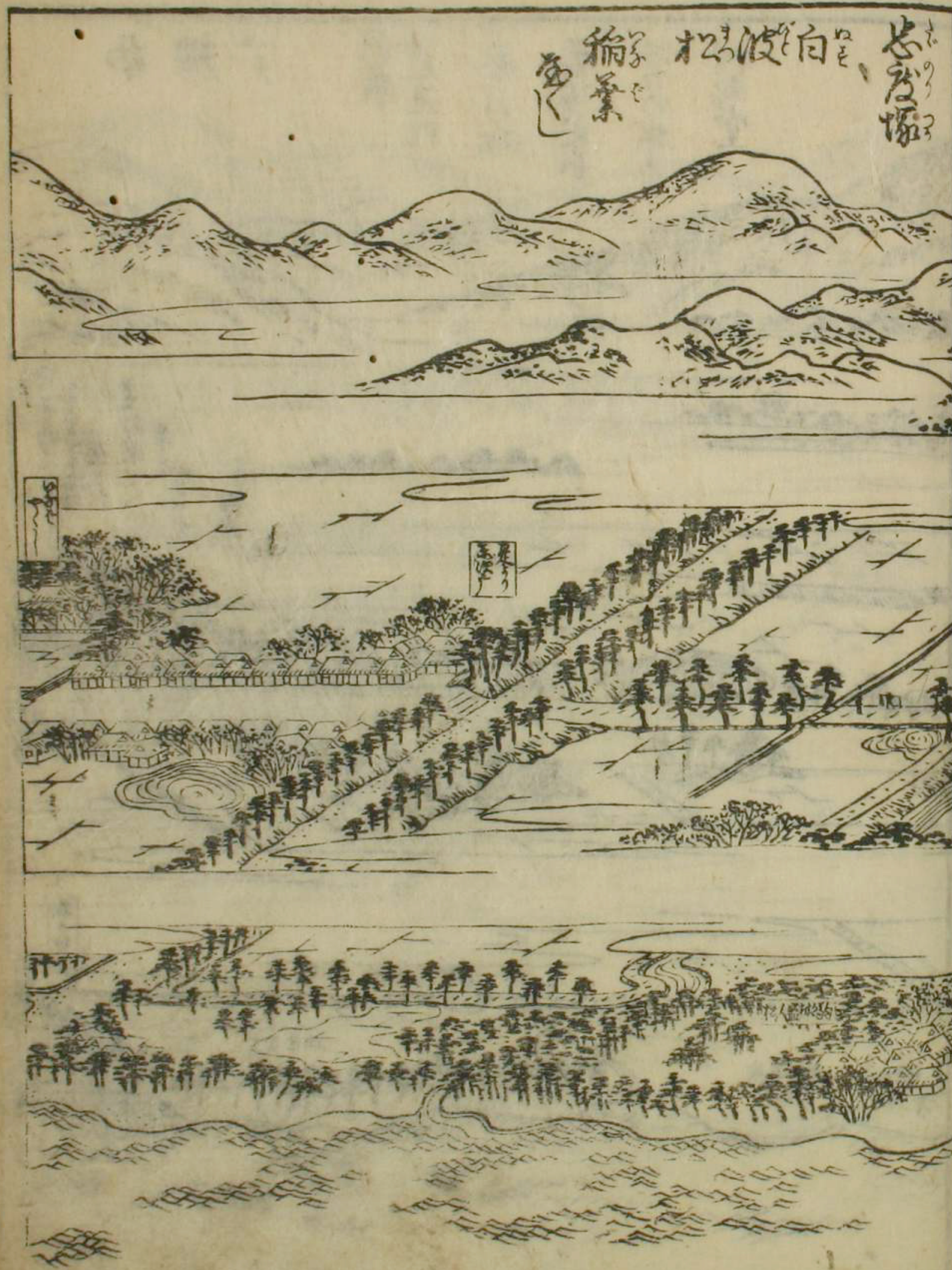
廣府

甄水

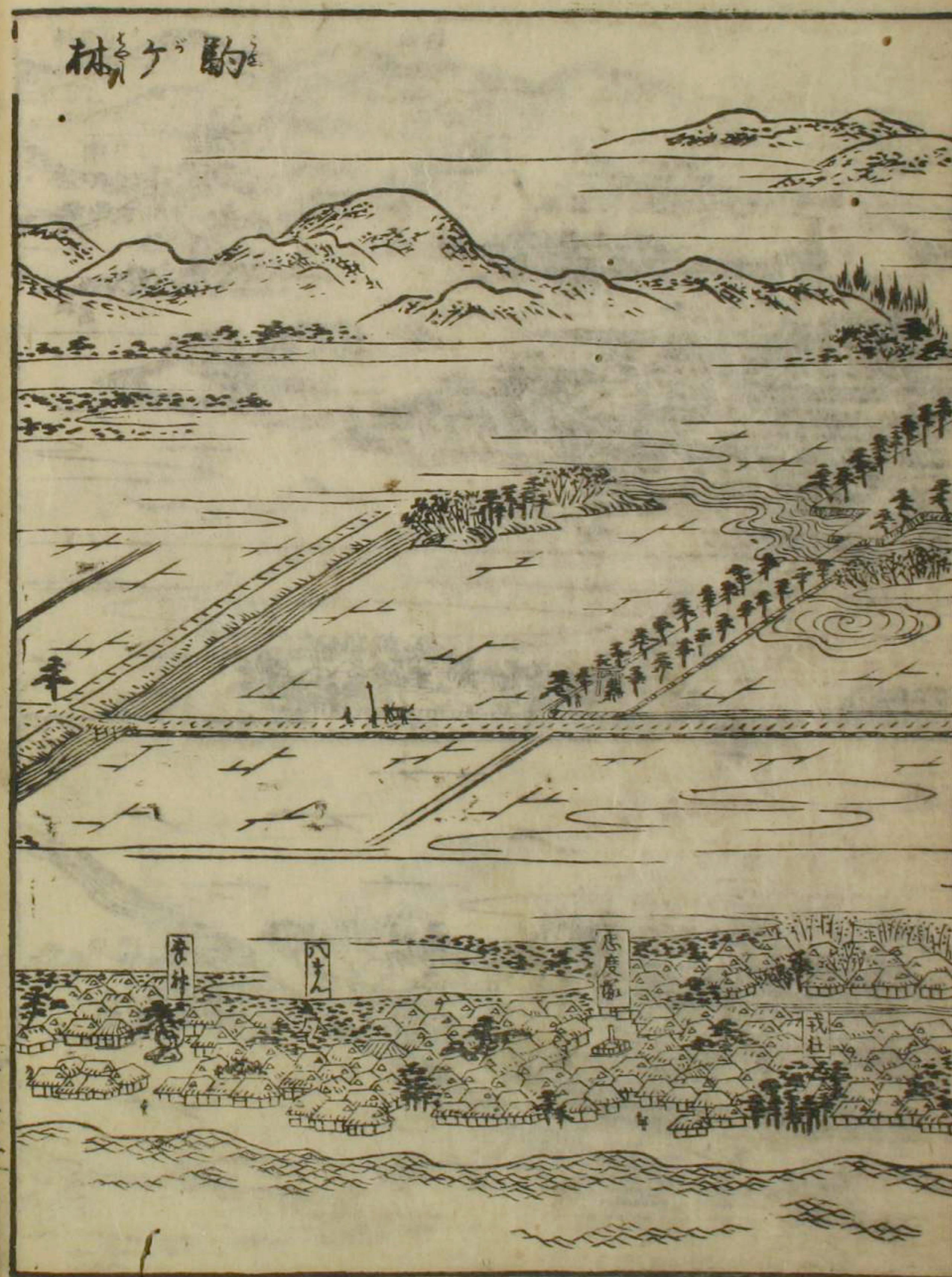


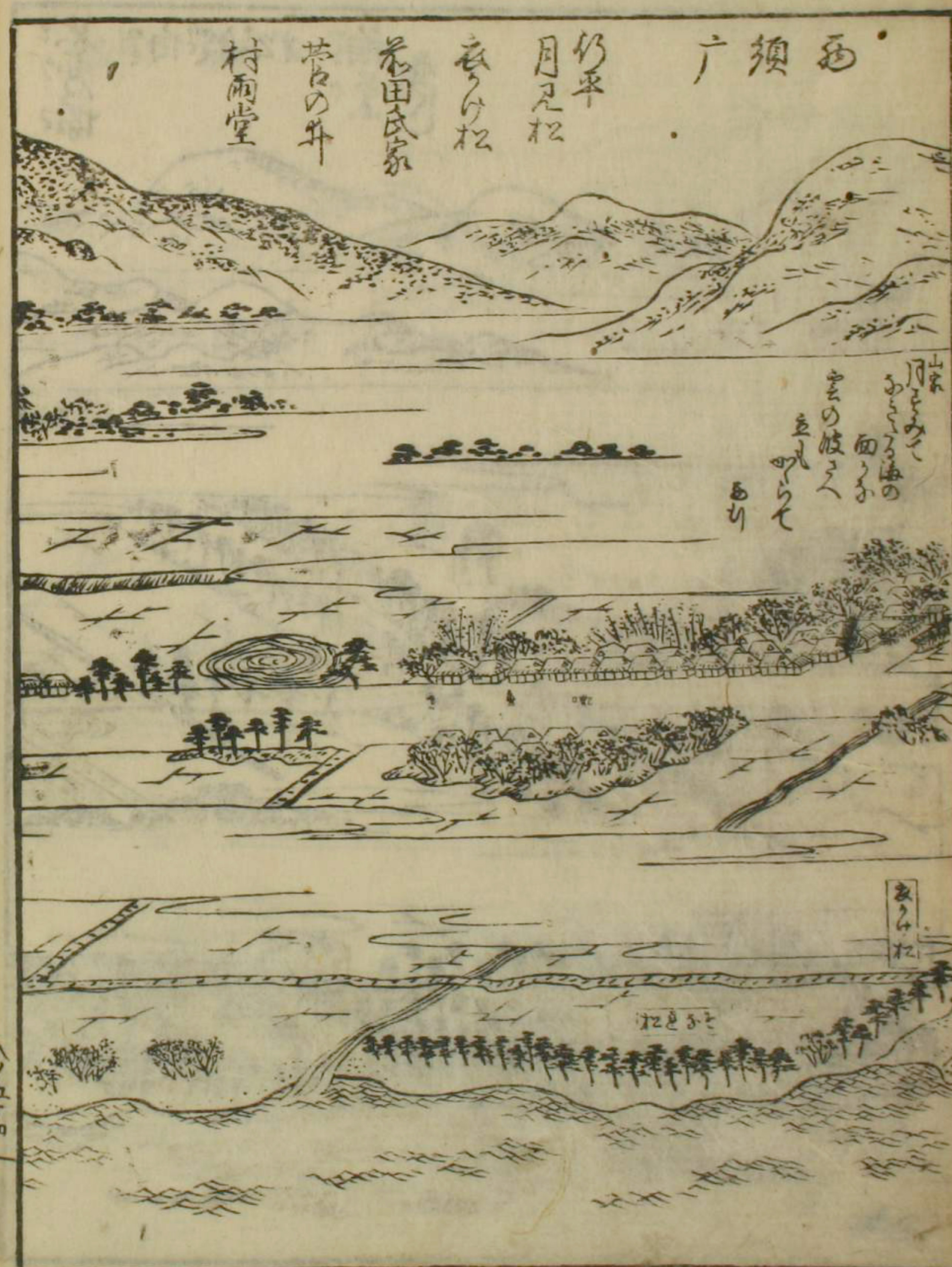
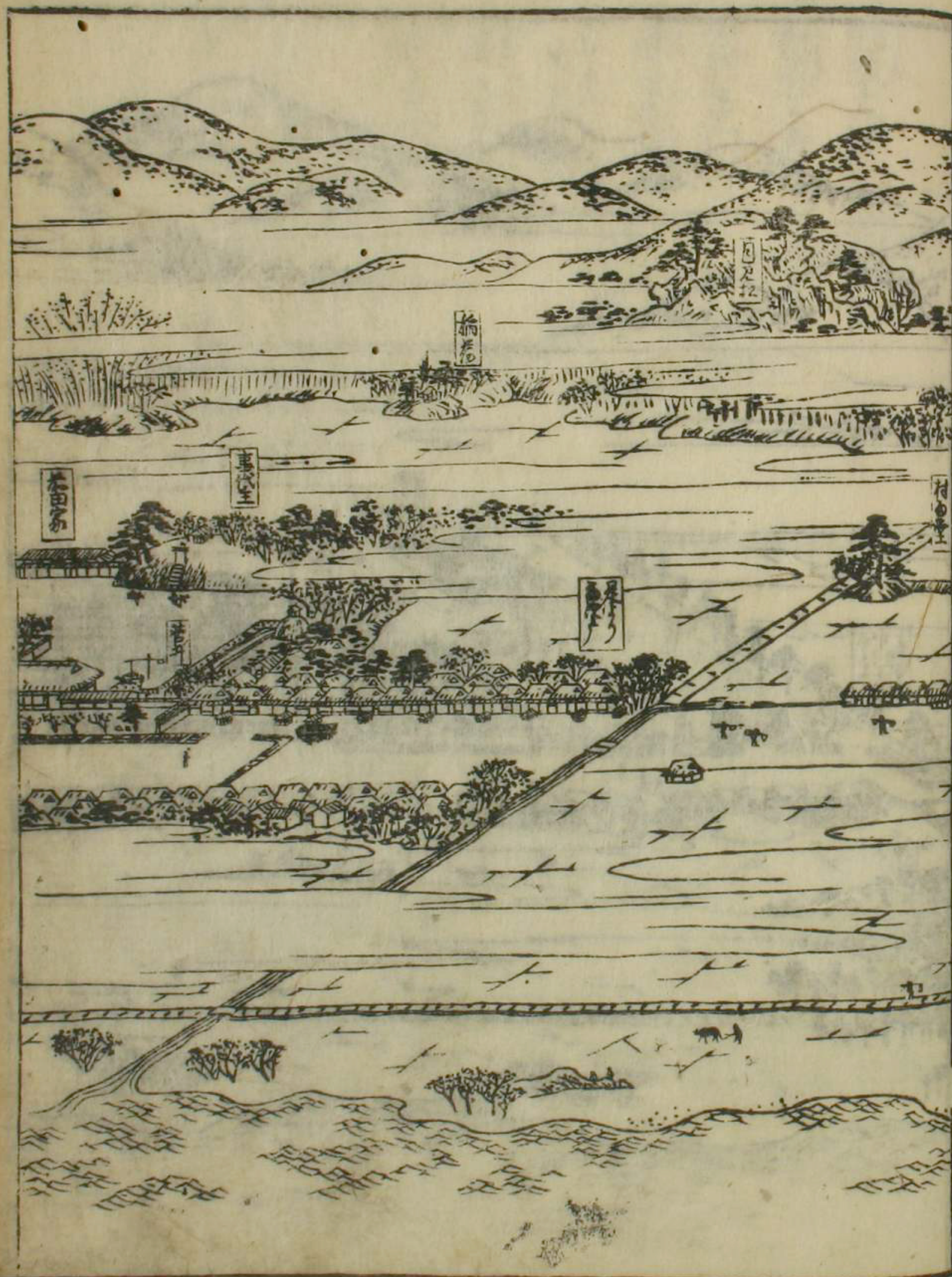


白波松 柳葉 長谷



駒ヶ林





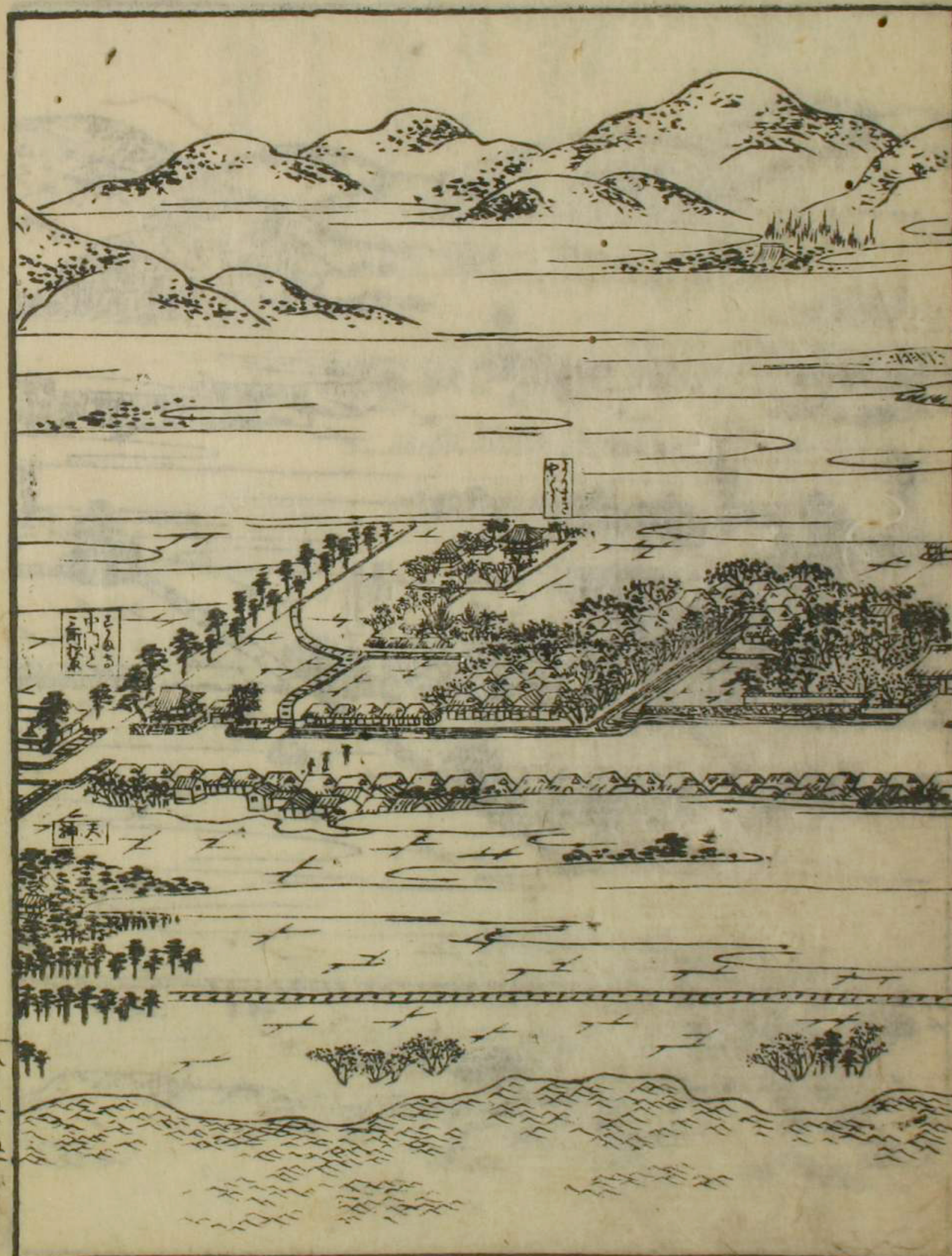
西須戸
 仍平
 月見松
 衣の松
 花田氏家
 菅の井
 村雨堂

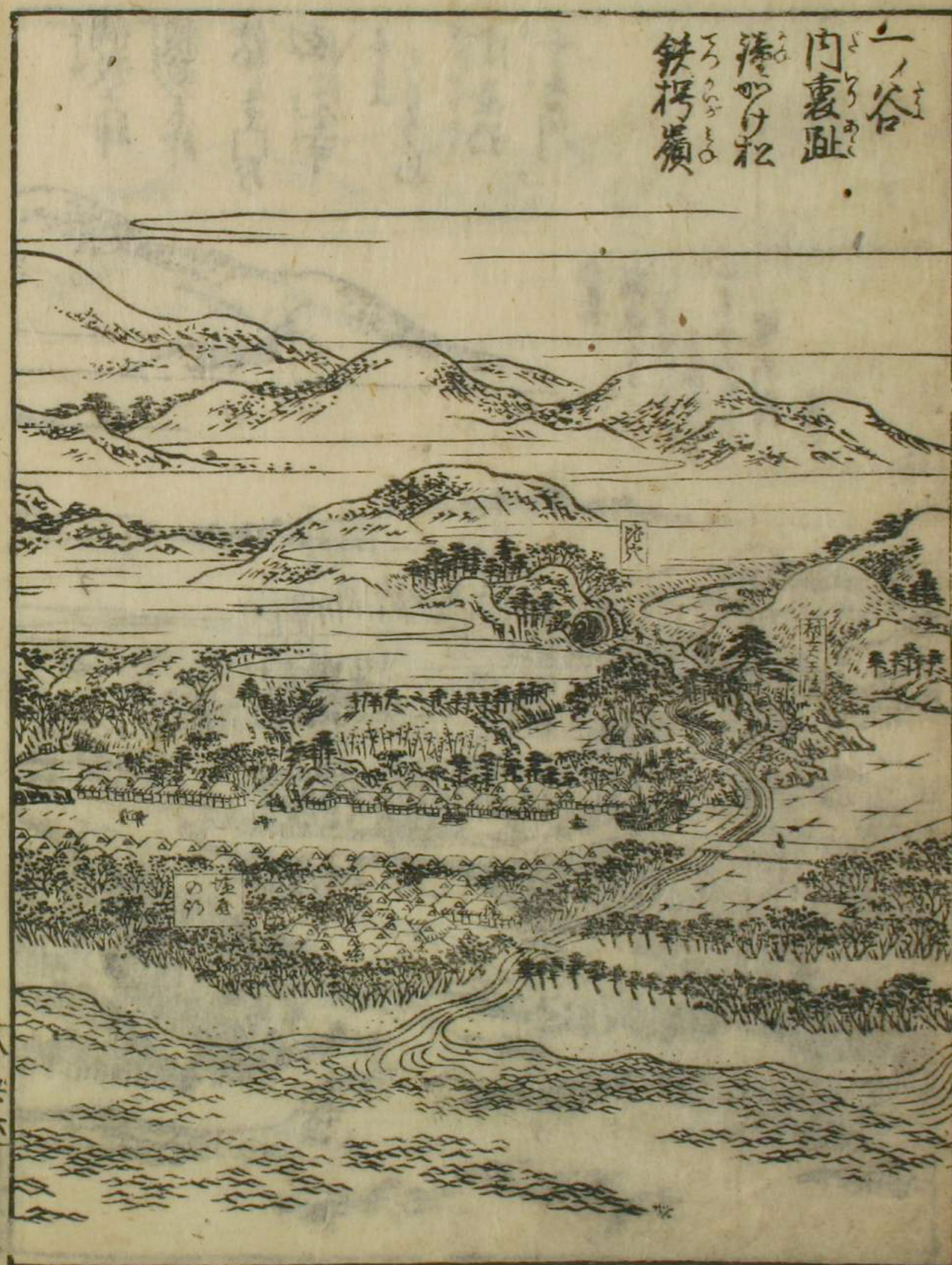
山家
 月見松
 おるる海
 面ふ
 雲の波う
 る
 あり

あふ松

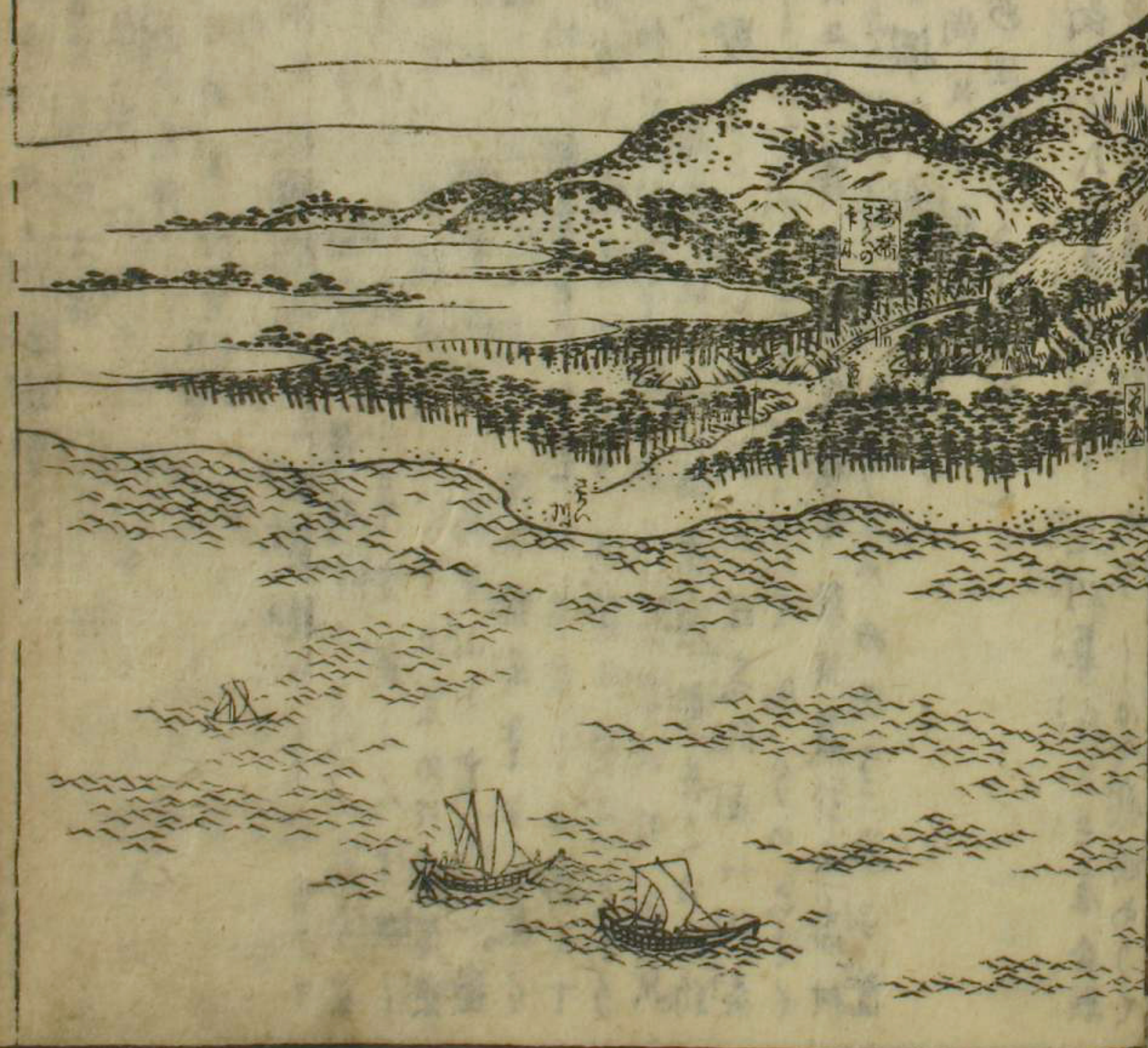
ねとふと

新屋拾
藏書
著者のふね
と海の家
やうふふふの
曉の聲
定家





千載
 鐘伏山
 二ノ谷
 三ノ谷
 敦盛石塔
 鴨斗
 南うらまけよ
 吹戸あし
 千載
 ちうはちやまの
 関登の板ひさ
 月めれとや
 まつろおとん
 中納言師俊



如意山妙法寺

妙法寺村ミョウホフ新鞍馬寺ニイサナバといふ
眞言宗 坊舎七宇

本尊毘沙門天

長六尺許

奥院

蓮臺寺と号し
阿彌陀堂あり

嵩寺初

聖武松の

勅願所

伽藍魏々々坊舎三十

七
年
の
荒
廢
及
び
諸
堂
の
礎
所
々
々
定
範
上
人
市
興

寺の寔^{じつ}大^{だい}匠^{しやう}仕^しへ^へ剃^は髮^{はつ}條^{じょう}の^の人^{ひと}少^{すく}く^く十五^ご茶^{ちや}の^の洛^{らく}陽^{やう}東^{とう}

示シ瑜ユ伽カの奥ウ音オン成セイ明メイくろ止ト觀カンに通ツ加カ外ガイ活カツ水スイ發ハツ馬バ寺ジ子シ龍リウく

七坊を達々あの方小 観若堂あり 北嶺小 梵天のおあり

高倉院の雨
 福原遷都長久の御祚

新發馬寺と詔依蒙内其後高師直曰師泰

再當あり 什寶ふ 彌徳帝宸翰の經紙藏む 又富村
 入口ふ妙光と 寺あり 妙法寺 乃 弘治

今禪宗源家と成

車村小あり妙法寺より十町計之

長八尺八寸建武年中足利尊氏乙未座合我

の時は本尊弘信作あり
一ゆ人應驗ありて

一法條と現れ敬より射る矢と宙みく捨ひ味方の猪村といふふいふ名残呼より旧地ハ云庫南侯奥澤堂ありひり

い本尊小
とを故小
真の
堂の
名あり
又天火堂と
又
戴
獻
寺

の鑑蔵
是れ
奥の
堂の
本と
称は

檼の太サを丈六尺枝葉末の方

一丈新あり山をみ
 州賊と白波と人車後漢の

張角が傳より出たり
三才圖會 大の村小わつ
劉素六月廿日八月廿七日

大板宿聖田惠廣等の生土神あり

神聖權現
人狐謬一乃之終

攝社
右事代主命
右大己貴命
右瓊瓊杵尊
右天孫命
右甕槌尊
右織織媛命
右玉織媛命
右八咫鏡
右三足金甕
右神寶劍
右草薙刀
右石凝姥命
右石土師命
右石土師命
右石土師命
右石土師命
右石土師命
右石土師命
右石土師命
右石土師命
右石土師命
右石土師命

尾山勝福寺
古義興言宗坊舎五字

奉尊聖觀者
弘法大師の作
賜士不動毘沙門
長三尺六寸計

同基證樂上人 一条院御宇永延二年絲也權興の示現と

大昨の錫杖しやくちやう薬くすり膳ぜん供く養やうの奉ほう爲ため十六じふろく若わか神かみ像ざう同どう膳ぜん十じふ日にち流りゅう

守の禮迦文殊普賢摩訶般若經平相國の寄附く武藏

新章の甲曹龍の玉具外綴々々々

通磨里

舊取磨と書次を庫津より西を里寸小あり西須磨
東次磨溪次磨の三村あり原と今の西須磨一村あり

東次磨のいへり一過堂村と云ふ上古の山陽道の驛に延喜式に
 出づり今も農家のいへりく海濱あれど漢竈と云ふイ
 言今田の北岸村に事あると云ふ所のふゆと云ふ云々

世々富貴のうちにはある人ふいふくを

三つをいふ人あつたはあゆみの浦ふりかへつゝさびさへな
 まるはな

思ふ事満ちむうゝそぞろ人のさあやもむおろけも今ふかき里に
 んをうて海士の家でたすきにむすね人志けくもくけ
 たらん恒産の心本意かうるへさるさく都を遠ざくんも
 故つおほつね久きと人つろくぞおほくもるも弟の事さうく
 ゆくもあひはくをねふふかしたといやさ満く

ちきり入る秋やと満の秋

月之見也物者之生也
不若此

ほろくと雨そふを乃坡せうか
瓢水

須磨屋すまのや
 毎次慶の家毎小常小表の方簾とあき土人曰いひう
 一各の城いさであうさるのあ 安徳天皇成さうたんまうり

久宮人^{ひさのみや}はもと^{もと}の里^{さと}海士^{かいし}の俗家^{しやくか}小^こへて^てせむい^いふ^ふく^くは宮^{みや}とて^て人^{ひと}に^に附^つく

猿ちやん衣えやとさささ次磨乃古簾
既白

名産儀 割味酒
又、麦うぐ、割、ろ、味、旁、近、世、水、の、名、也、と、水、の
又、側と汲ろ弱と葵中成側新水とと水の

農家今も食一々取り風月庵のぬい
次磨ふ所居のあり狂奇と詠る

休めれ^ひ身^みみ^ひむ^むむ^む味^{あじ}む^むむ^むを^をの^の麦^{むぎ}み^みや^や潮^{うしほ}雑^{ざつ}水^{すい}
 仙臺

足跡うちふ月影をさうり
次麿のぬ
蘭更

古語多しむういふ浦小姓あうしうとる海を渡り

計ひしうとて

拾遺
白波をそと、夜ふゆとあはれ、赤石も次々まどかの津く
人見

古今
まゝ使のあまは塩をく煙風といふやぬ方ふたふたり
世々をうけ

須磨の海士に逢ふ夜あきとあふとほ遠くわきてる君をよせぬ
 日

正史の浦小焼
 土厚萬葉之
 意を盡す
 後撰

又曰、公は此の桑が、ちきりう、葉を、はさる、頂、は、南、人、
維成

上卷

新吉

さほのあはれ社を吹とに塩風のあつとをなをななうに

定家

日

あはれりうたふれなを吹塵の海士は汐をたなを遠成らん

女御殿子
サニ

日

さほの浦乃あたる潮めもさふあふまうあまの浦舟

五永春

後古

はまのあまは浦く舟のち成後よりあな身を悲しうなる

小基十郎

源氏物語
源氏物語
源氏物語

生本

さほの浦乃く舟のち成後よりあな身を悲しうなる

五永春

されとさほのうへむううう月の名やとあみくく紫氏も中秋乃

源氏物語

月乃はく紫氏の事より書初めひくくわやわの事にあふひく十人

秋のうきとあはれしあふ屋上の清はひきく新うかうめあふらん

うくくあひやうあふすはけても月の教めさくくはく二千里外乃

故人の心とさくくあふるまの涙やうあふるさくく光源氏

さくくはくさくくさくくさくくさくくさくくさくくさくく

あれううさくく光源氏

八六十二

あまうつむかけたの中ふさほなれてあの中をさくく浦くあふ

をほくく秋風乃海がくさくくわわ平の中納言は国吹まゆさく

いひく浦浪よりくくあふくさくくさくくさくくさくくさくく

うはく秋あふるさくく中書^{中書}をさくくさくくさくくさくくさくく

いひくさくくゆれくさくくさくくさくくさくくさくく

さくくさくくさくくさくくさくくさくくさくくさくく

せんさくさくくさくくさくくさくくさくくさくくさくく

あふくさくくさくくさくくさくくさくくさくくさくく

さくくさくくさくくさくくさくくさくくさくくさくく

あふくさくくさくくさくくさくくさくくさくくさくく

あふくさくくさくくさくくさくくさくくさくくさくく

あふくさくくさくくさくくさくくさくくさくくさくく

あふくさくくさくくさくくさくくさくくさくくさくく

つゝひく啼聲うちの高ふまゝに成れあひあやしく湧かすに乃
こゝろをどのたそひける湧きあふくちを湧ずふとえぬるを
故にれ女恋した人とのと湧きあふくちを湧ずふとえぬるを
源氏云

恩賜の御衣を今あふあり
菅公を字着とぞうつさぬちぞを滅ふ
やくの詩の句

きふ琴の聲風ふはとてそらふ雪ゆかるとふて雪をうそと雪へより
五糸君

源氏の君は
こゝろあつて
いふはかた
いふさき
いふの浦か

一、中畧陽州より七を之世に中へ概尔風ふたふと云

中畧
きくわく
よくわうそてんほくをひすゝふ君のいじやう

糸纏うちどしかりす著ぬれの袂をさうあうやうく風をようもぬく
 おほくそけうぐんぬのちうゝあふべし
 あれををけ明石の文學
 澤田邦美の詩ふ

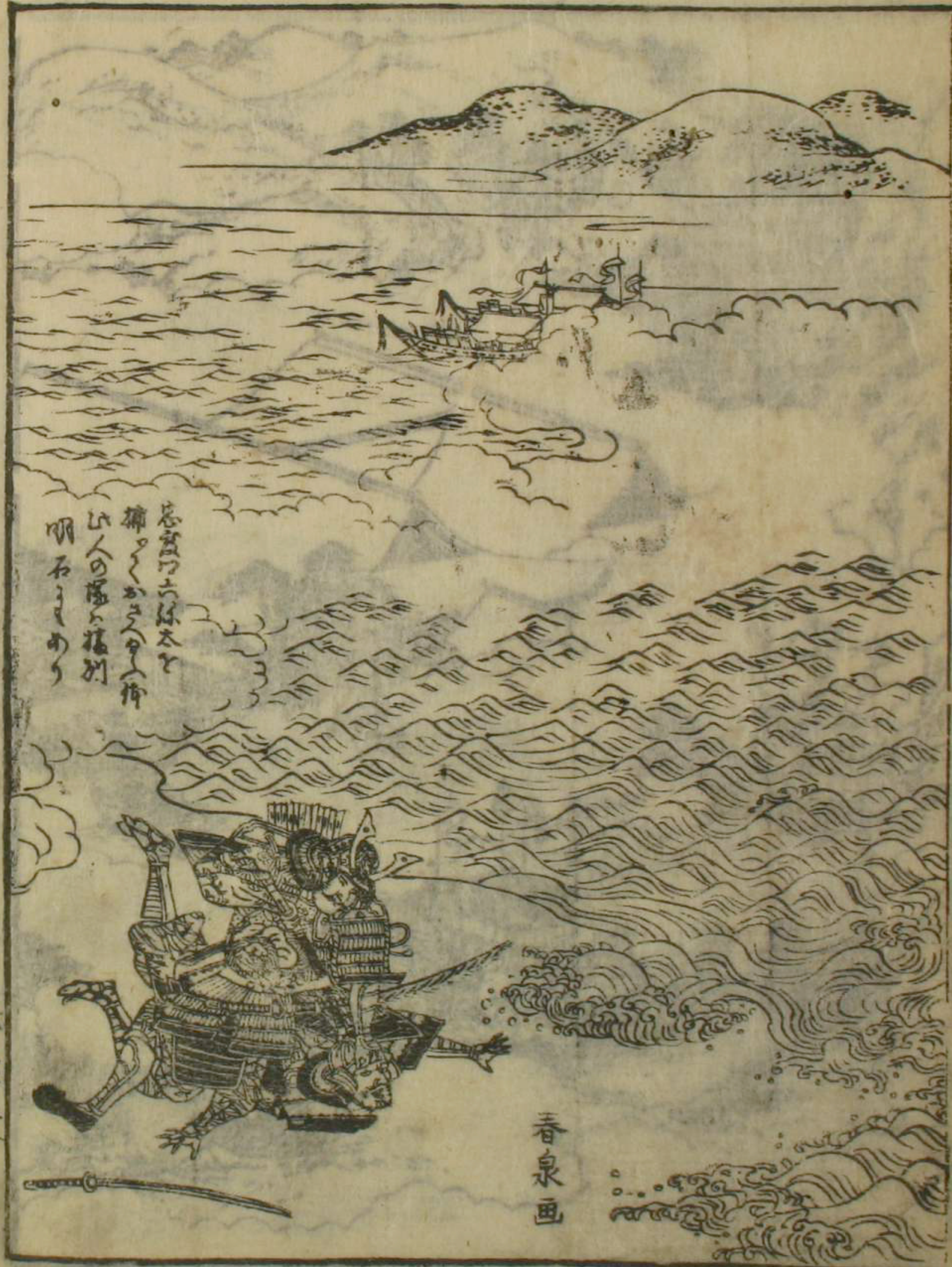
南浦寒烟憐夜月，北山芳艸憶春庭。

百丈崩濤天潑墨，可堪雷雨撼茅亭。

○河海抄の序云光祿氏ハ一條院の時寛弘のちりめふ出来て堀河院乃
 康和の末弘まりける^{と云云}同抄云源氏也宿のおころ説々ありと
 之とも西宮左大臣安和二年太宰権帥小左遷せられぬいしうの義式ア
 おさなくよりあれまりくぢひかけたる院大炊院^{選子内親王}より上東門院へ
 めづりある皇子やまるとなるの^アさせぬいさふり^{竹や}院の古
 お治めあれ^{と云云}を^あけ^るに^うり^いづ^くまり^一さ^う式ア小
 おほせら^はたれ^を石山寺小通教していま^は新羅^アに^おり^も
 八月十五夜の月潮水^ふう^門を^のを^みけ^るま^に也治の風馬^を
 ううい^る成^をれ^ぬさ^んふ^とく^御衆^小あり^し大般若の料紙と
 草^をふ^やう^けく^光を^のり^のあ^まり^たそ^めり^うこれ^ふより^く
 次^のま^ふあ^うひ^ハ十五夜^をう^ると^おぼ^しい^づと^信る^後罪障



平家
一門
足



春泉画
明石の海

行平月見松 東次平のふれ松 古松の八樹七本あり ひく

賞月亭 東次平のふれ松

衣懸松 東次平のふれ松 松風の謡曲

因幡遠山松 東次平のふれ松 寅卯の方半町計あり松風村の松

立つれいふ松 東次平のふれ松 今より

因幡業師 東次平のふれ松

本尊業師佛 東次平のふれ松 長き寺観行平卿は浦にあり

松村雨齋趾 東次平のふれ松 地といふ松村雨齋趾の上あり

村の二人 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

磯松 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

名倉協 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

網敷天満宮 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

松村雨齋趾 東次平のふれ松 松村雨齋趾の松村雨齋趾

あまのうみ
おのうみ
かづね
きく
ひこや
あや
あめ
うめ
光君

光君

西村中和圖



やまのうへ
林に
あふれ
あふれ
あふれ
あふれ
あふれ
あふれ

せん君

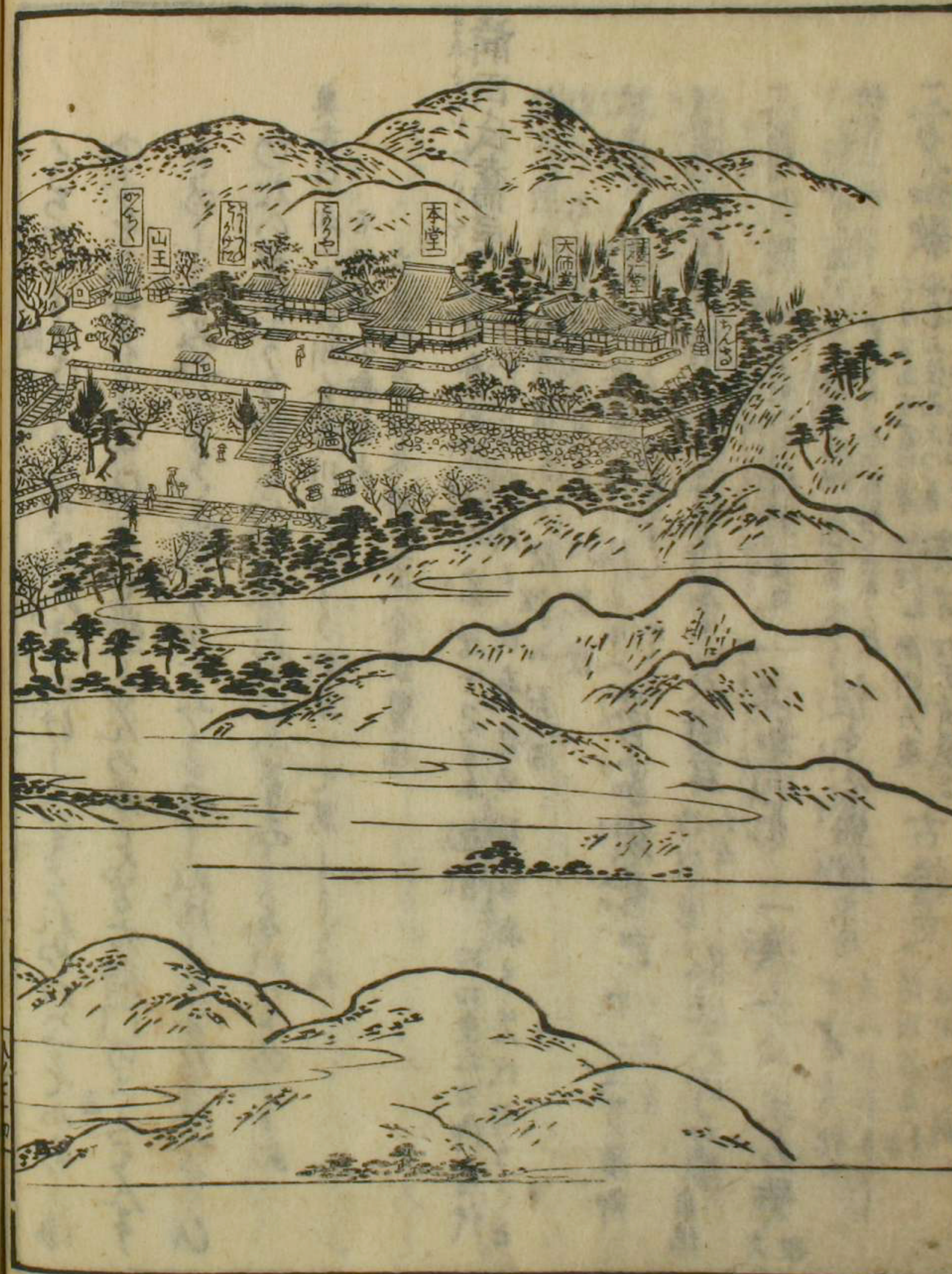
主人君



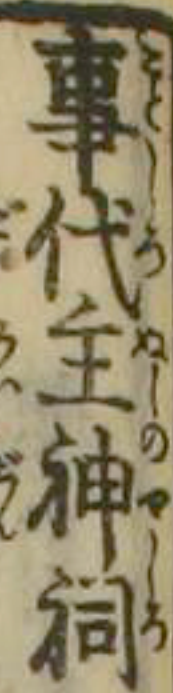
1624-25

[illegible]

須磨寺



門
米



土佐計ふや土佐の初めは
鍋竿の糸にさうかや夏乃月

釣人ふりびく河原少敷

菅の井と汲むところ大月を奪ふより神の恵み

頼政藥師花田のあ次廣寺の入口あり寺跡と澤福寺といふ本堂の
 傍に澤堂あり近年再興次は寺に花田氏の抱所あり
 本尊薬師佛聖德太子の御化長き尺計脇士十二神將を
 彫刻冠領主おき山茂の家附ありは地をむく

諸堂巍然より次記小上野の畧とて所領の寺の事なりとて其後
破壊及びいふ久馬の元源三位頼政を興せり故に名とて
例年三月に鬼踊といへ半あり追跡のめくある鬼の形として
村民さうふとせり

重衡

重衡松 某師堂のあふあり平三位中將を重衡卿に平相國立男として

平家物語云 平三位中將重衡卿は生田家の副將軍に坐する其日の衣束ある
ちん白く黄ある赤やく岩小村より獲る直垂ふけ系下濃乃
鎧着く鉄形歩する甲の緒糸綿金佐の太刀を帶正四角なる
截生の矢負滋藤の弓持く重鹿毛を圍ゆる名馬小金覆
輪の鞍置く騎給て乳母子の後藤兵衛盛長は滋月結乃
直垂ふ緋絨の鎧着く三位中將のうも秘蔵せられける秋月
無月もあやふされける主従二騎助船ふあんとて渚の方へ

落あふ所小庄四郎高家梶原源太景季好歌と目成懸燈を食て
追急する渚小助船共多ゆられも後より歌い追急するあき
際もあうられも濃河橋藻川はあはれ運の池は馬も小見く
駒の林と弓もふる板宿次唐でもあきとてあて掃きあはる
三位中將の孝子鹿毛と云圍ゆる名馬ふ系給てその伏ふ馬共
容易追付て共見たりけれ梶原あやと遠くふ能實て兵と
放川三位中將の馬の二頭を寛深ふ射させて弱きと乳母子の
後藤兵衛盛長は吾馬召れんとあ思ひん鞭はけてを逃たりける
三位中將如何ふ盛長けれと捨く何くひりせ目来はるあき
しものも宣ふも空きうびて鎧小付する赤如き撥り捨て北ふ
あき北よりけれ三位中將馬弱ふより海へ朝とあ入給へ身は
投んていふも其も遠く沈むと掃もあうられ腹を
切んとてあ所小庄四郎高家鞭燈を食く馳あうあは馬か

中將を衛門
須磨浦に
源氏の武士
やういふ人



三佐中ねを衛門は生田の合戦
敗れて西とくく落し
のり庄四郎親承源太
系季など追ひつゝ
生捕たりけり成足捨て
後石を清盛長へ還し
て則ち追ひつゝ王君の先途
と見ゆけり命と今人
はるへ剣と振る其君と
戦ふも北せんや

飛く下正あり何くとも神供仕候りんごのものとやしく我素
うらうら馬小橋素還生捕まり鞍の糸福小綿付奉る我身ハ
素替ふ素て味方の陣へ入ふ乳文子の盛長其はあん
那く逃延く後々然也法師の庵中法橋瓜憑く居るる
法橋死く後後家の尼との訃詔の爲小都へ上る小伴と上るる
空憎や後藤兵衛盛長が二位中将うも不便ふるひはふに
一筋ふ如何もあふ思ひ寄ぬ後家尼との伴と上るる
とく皆凡弾をぞとる盛長も流石耻しくと思われん願
願ふやうとて聞

これ監物太右主君和盛と助け和章の先途をえん今と思ふ換
て是名成萬代揚る後藤盛長主君膚と成る人ぞとて逃延て今を
全く一應名と後世汚次郎の爲渠彌具君照公に弑しあふも
盛長ふ比せんや君子成人之美不成人之惡小人反是とての誠也

上野山祥福寺

西は上野山あり街道より松原二町とゆる格あり
それより二王門小至る風流の格地と古義真言宗

本尊聖觀音

海中より出現
海傍長之入す和田中津の

護摩堂

本堂の左小あり
不初そ安次鎮守祠

慈母権現王置権現
赤財天がある

神功帝釣竿竹

本堂の乾小あり
樹生田社あり

義経腰掛松
本堂のあ

馬盤額

中門小掲る
上野山と書次

二王門

冷剛力士の二天安次
運慶法慶の作

十王堂

高山入り小

什寶

教ふあり大観は
あにあら

敦盛赤旗名所

法教上人等爲敦盛堂願隣清菩提書之源堂
願わあうもあせををてたうと法虎の蓮ふり小せう

保良衣名所

蓮生法師等願わあうもあせををてたうと法虎の蓮ふり小せう
法の水とみと観て若くも心行具足は法陀佛力

敦盛幼少の跡

題をのる
やたさるても又かきこすんあのはあれたるの印る

敦盛画影

徳谷直実

敦盛鎧

高藤篠笛

學祐僧正

青葉笛

弘法大師の作
ふうふも若小きとて竹のうれむうとありひこを

寺説曰富山の寶物ハ貞享年中江府芝寶藏寺よりあに賜納しとそ
又備藩常山先生東行筆記曰今須磨寺ハ敦盛の笛とく傳ふれしと

次上野

とある里れ山胆ふあ

新千載

沿わけぬと海の上野れ落ふとあはれさる旅夜之邪

彦石

美止

鈴舟のよとる若とやさつらん次上野の上野小稚子唱と

飛馬

後の山

上野より山と丸く後の山といふ
土人の稲葉山といふもは中ふあ

煙いと迫くさくさくさるるやあはれの煙やあはれをば一ひさ

かりやさう一の山とあはれ一の煙とさうさう光つさうさく

源氏君

ふらのいほうふさけるさくもさくいとあはれさる里人

琴

惟光

あふあうさうあはれさるはれさるさうさうさうさうさうさう
らんをさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あさひゆさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
やめさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

美止

千首

月出さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

家長

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

為甲



就中花岡基俊の正家軍將の
中ふさうさうさうさうさう
力ありといふ八割の力
猪股小六と捕さうさう
着とさうさうさうさう
さうさうと助て基俊を討て
正家の運の頼くさうさう

あはれ

光源氏舊跡

次廣の西、源光寺といふ、本願寺御門跡、末北道場あり
 此塔といふ源氏お塔といふ、雙紙あり、古跡のあり、く

とも思われしを按よりふ西宮元大匠の謫居の地、實に現光寺あり
永正年中の建立の道場とぞ什物ふ陣を敷あり

芭蕉翁句碑

芭蕉翁句碑

芳蘿坊

見つてはたかういふはなれを次廣の秋

風月店如雲

源光寺境内に旧庵遺蹟あり人は浦上庵寛の衆あり
と歎く再ひ與さんと計るるなり

月不之沈之上登此秋乃風尾波不ほく浦浪

知
三

近世畸人傳云 俗に云ふ 姑の名は ぬき安藝國廣橋の人 奇な好む 初ふのやりと

倭所と定められ世に今ありといふ故穿く自も

[illegible]

救世菩薩
新其臺若
より河内
國弘川寺
なりと先
得

と名のあつしと建と其寺小有る尙儉とも櫻く出く堂成

送立ハ山中日摩ハ繼ハのく怪ハ要要亭とハ具時

通ふはむろの人すだともく弘川さこそみそめ乃紐
その店のはろさき一ゆふ二ひるに色ざれと人くみ

ひらめくといふたれか
我を度へうともさめたり雲の立居さうふをこそ思入

ひふわろほど又ろとふしき人信の附ハ搔齧と
 りゝもの二ひう成

香の食く一日の指小亮飯炊くか
小あまこけくゝ飯哉さそく後新乃
山人へアをそそ石に

お屏くあふちるにみふふゆりは極の下枝ありとも

次廣の浦亦有久々之く綴る壺竈派興く君たす

綴てまぬけの煙立ちの青ふりをむ埃塵のうら
ちのうらけの人の心をくくく吸てゐるまぬけの浦あそ

我再興せし煙も又々つりの絶侍りなれどやも
又々我しむ又つりとるにやけの煙も絶しけの浦風

わづらひのふりて大井の川邊あり弘川と稱しく同じと云ふ乃彦彦

佐々木秋の奥ふたゝ山妻より一の花下唐
の書水の奥ふたゝ佐々木秋の奥龍門の漸

切
 軍
 世
 所
 後
 お
 其
 自
 記
 乃
 嘉
 富

村氏ふ身とよせくそとつゝく受す體は遺言しく弘川ふ
りと同じく後の境を繋ぐ若く著る所右の二氣の外

雲鳳書と題し、儀司の
 尊の神位をたて、ふ
 座記の体小なり。

首とゞりめは弘川不有と云ふる所あり信作の人様に

りや庄志と次下畧

江
ありと名のまのこねを

万乘

六帖

1

頌

磨園堂

延喜式に出古跡源光寺の西街道の左右に
一壇の臺ありあれなり

10

續

新古

ち
ふ

河
 閭溪の旧名のあふあり一説閭守川又路守川又攝津志にあり
 速羅漢とありなり何より其是非なりあるに兼習の古流に

金

三

村上

子多川の西端あり上小祠あり大皇の尊靈と云ふ
 形りと云土人云む久敏大臣後束師長とい琵琶の

龍

郵天

五

蛇窟よのいり

柳上靈趾の奥ありけ敷小梅はふ新々ふあり香ととるに足るは
 上小梅を祠あり護云係氏君已の日れ後し中し助と

一谷

毎次廣の村より至り、至町、郷り、西ふあり、谷の麓二十間計、
高サ十二間、谷口より、波、歩、源、至町、余あり、谷の奥、源

五

1

三

日

五

旗

—

1

20

時

13

三

魏

—

籌策小羅く義兵もあつ小喪ひ功名も一時の輩とあつあつ
さりぐもあつと憩ひく懐旧は述古戦場とあつあつ
あつと

祝氛一抹紫微星海岸忍留舟翰青

冠蓋春寒風度谷劍瓊雪暗夜過庭

鄧軍蜀嶺九天下宋主崖山幾月經

赤幟光消空返炤無人對酒泣新亭

内裏蹟

一谷の上ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
不もの地とていふ一谷の城墟ありて安徳帝の宮とていふ

陸懸松

一谷の半腰ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
古松の株は伐て額板とていふ田氏の形に掲る

鉄枵嶺

一谷の半腰ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
一谷の半腰ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

鉄枵嶺

一谷の半腰ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
一谷の半腰ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

鉄枵嶺

一谷の半腰ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
一谷の半腰ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

登鐵枵峯 二絶句

鉄騎三千雲厭山翠華一去慘龍顔

邦美

鰲鼉赤幟春風色留在夕陽松嶼間

古壘鳥啼不見人嶺雲澗水共傷春

同

誰知夜半風前笛吹落梅花作戰塵

鴨城

鐵枵嶺のふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
鴨城のふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

二谷

一谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
二谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

二谷

一谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
二谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

二谷

一谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
二谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

二谷

一谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
二谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

二谷

一谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
二谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

二谷

一谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
二谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

二谷

一谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
二谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

二谷

一谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
二谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

二谷

一谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
二谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

二谷

一谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
二谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

二谷

一谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて
二谷よりあつた所ふのりてくはての地とていふ古に二十七年計ありて

田井畑
松尾村の墓
日登浦址
龍尾春雨屋
八幡宮
鏡の池

松尾村の墓

田井畑

松尾村の墓

松尾村の墓

鏡の池



敦盛石塔

三谷より西へ町あり五輪の形小梵字あり塔實一丈
北條西園寺入道平貞時平家一門我死冥福の爲に建たせし
俗の代より敦盛塔と稱し今もその跡あり

太夫敦盛卿の修理太夫經盛卿の二男あり十七歳の時に
落足して澳ある船小舟にかけ馬と海へち入る六段をり。瀧せ
られふより然谷直實追ひけ藤と揚る振るれを取てり
波打際より組と討てりぬ負成包んとて體の直垂を解く
えれい綿の裏に入れる笛成を腰に括れるわがひい曉一谷の
城中より管弦しゆひつるい人々をておろろ物とて大將軍
の見参入より又盛表記あり敦盛の尸體と父のり直實
送りせりやうけりえれに煙まらぬわがとてく括れども
年々くく云傳へられ世俗小徒ふも可く

敦盛石塔

一休

昔斯地有戰場名流血染殘嫩木櫻
須磨浦風散花夕恰如熊谷打敦盛

若く絶たぬ葉のええーあー竹

螢火やまひく麻れ風乃あ

界

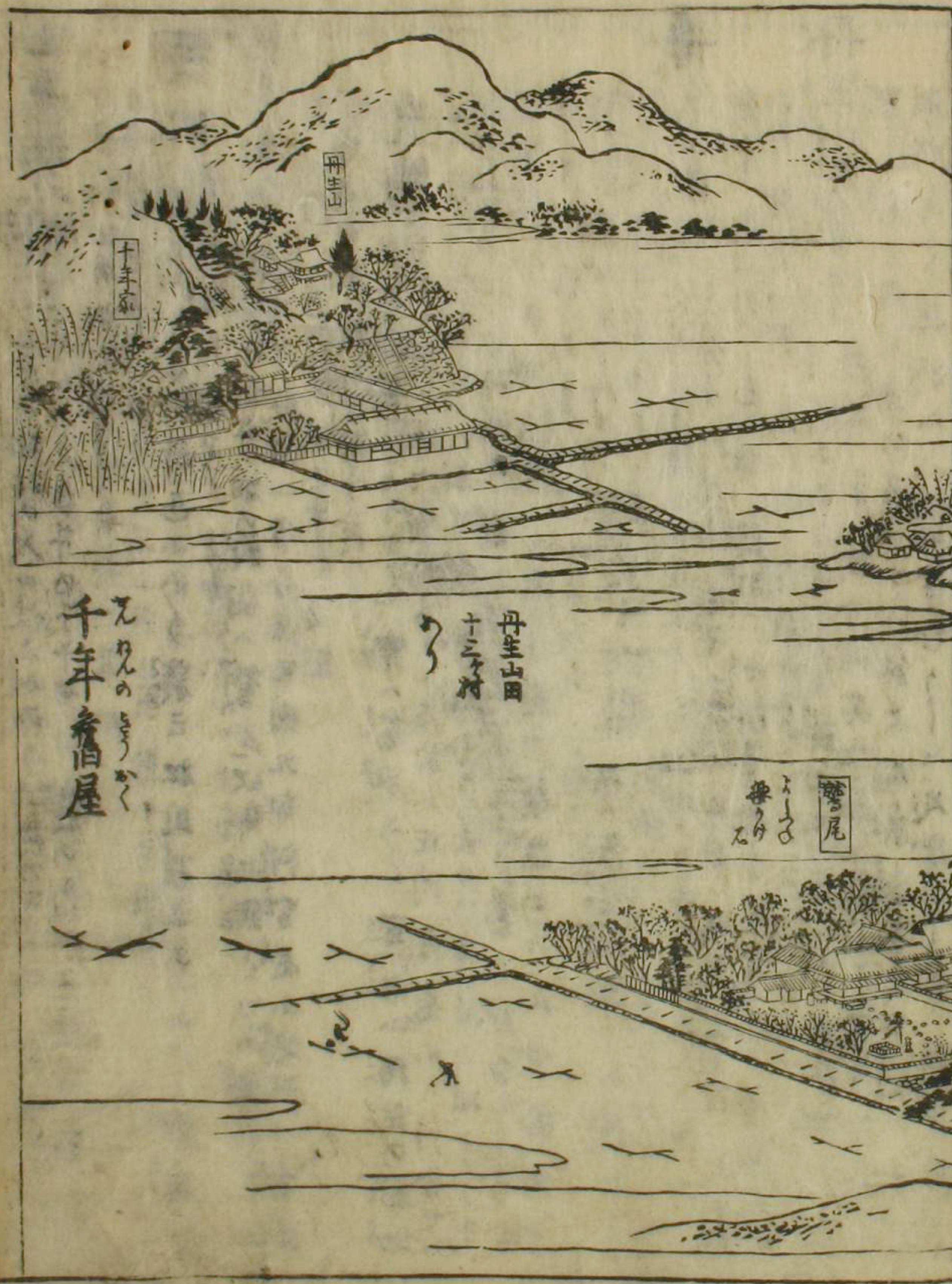
三谷より西へ町あり五輪の形小梵字あり塔實一丈
北條西園寺入道平貞時平家一門我死冥福の爲に建たせし
俗の代より敦盛塔と稱し今もその跡あり

大井畑

大井畑の村中ありけ地の字大井畑とてり古老云
ありけ地の村中ありけ地の字大井畑とてり古老云

松風村雨二人墓

田井畑の村中ありけ地の字大井畑とてり古老云
ありけ地の村中ありけ地の字大井畑とてり古老云



田井 細村の入口に上ふあり
又多井の下十歩許 藪の内小土神乃 祠あり
十五日

ひくは田井畑を廟さう
 又歸の小祠ありと云

鏡

池
懐官四下本無
見く變成
計五二
請云松田
所鏡池

田井 細路尾旧屋

田井 細の村長不替尾次郎兵衛といふ者あり
 一谷合戦の時九郎判官處不替越の邊路

兜鍪

[illegible]

後の方へ又引合せの上
散の裳にこれあり
義平革小糸紐其外
も
襦袢の裏に糸の模様あり
又喉輪佩さる

空徳

熊毛戎のり
製で方あり

征矢十六筋

根ハ厩俣澄通一の讀取リ
又小あり十六年あり

丹生山田莊

上谷上 下谷上 原野 橋 山地 中村 坂下 村 新 偶

丹生山明要寺

月莊ふあり山高嶺絶壁ありく坂路嶮一谷
 の源キ半殺十仞其北界小傍く水槽瓦空に

架一 流と通に槽の長サ六十餘丈 風系を去る下流の
 村に 庵を播磨不入道寺ひううの久庵ううく 諸堂嚴重

本尊十一面觀世音

嵩山開基ハ
 聖明王の
 なり
 然明天皇の
 御宇
 百濟國
 御者
 人
 年
 朝
 へ

赴ん^{とく}銅^{くわ}船^{ふね}を^と乗^りて^は我^{われ}國^{くに}赤^{せき}石^{いし}の^ふ浦^{うら}小^こ着^{ちやく}家^けを^し討^うち^て小^こ鬘^{まんと}髪^{かみ}を^し
 老^{らう}瓜^か載^{さい}と^して^は老^{らう}翁^う忽^{いつ}然^{ぜん}と^して^はあ^りて^は日^{にっ}本^{ぽん}小^こ有^{いう}縁^{えん}の^ち地^ち
 あ^りて^は是^{こゝ}より^は世^よ實^{じつ}に^は忠^{ちゆう}ッ^と名^な山^{さん}あ^りて^は耀^{やう}祐^{ゆう}成^{せい}投^なげ^られ^る
 老^{らう}翁^う者^{しや}を^しれ^ば成^{せい}慕^ぼ入^いる^は心^{しん}を^して^は紫^し雲^{うん}を^して^はた^たな^な
 び^と老^{らう}翁^う樂^{らく}す^はて^は老^{らう}翁^う々^々れ^て茶^{ちや}花^か間^{かん}作^{さく}に^は其^{その}時^{とき}老^{らう}翁^う忽^{いつ}然^{ぜん}と^し
 の^を寫^{しやう}像^{ざう}と^し現^{げん}れ^ば光^{くわう}と^し放^{はな}つ^て老^{らう}翁^う男^{なん}其^{その}市^し安^{あん}成^{せい}成^{せい}と^して^は
 本^{ほん}と^し作^{さく}れ^ば
 あり^{けり}
 鎮^{ちん}守^{しゅ}
 山^{さん}王^{わう}権^{けん}現^{げん}牛^{ぎう}頭^{とう}六^{りく}王^{わう}
 ぶ^ぶ織^し冠^{かん}と^しあ^りて^は

十王堂

中多地藏菩薩
脇士亦十王也安以

護法普神祠

奉地之日也
安並以

大師堂

弘法大師成安次
護摩堂之云

養堂

其外客殿厨等あり
余ハ之に畧次

安養寺

同莊原村ふり真言宗
醍醐三寶院ふり属次

本尊大日如來

佛工湛慶の作
脇士二大坂安次

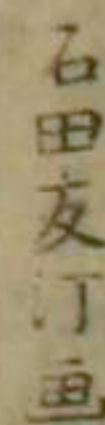
鎮守天王祠

此所の生土神と云
 勒曰長祿二年篇

八幡宮

同莊中村あり生土神と候御祭九月十一日長徳元年
五月十六日防別基燈法師小神託ありとありに勸請次

一谷逆落し一の標者
 丹生山田東下村
 あつ具時賜に
 太刀二振
 什寶と
 又應小
 義源公
 陳ある
 あつ具
 士の案
 ころふ至る
 賞と古戦場の
 蹟と存るも
 多し



一谷へ落さうと思ふに如何小勢々叶ひ候ゆ凡二十丈の谷
十五丈の岩崎ありは容易人の通ふ處も様も候はれ其
上城の内より落穴あり堀小美とも植て待進せ候る蓋て
沛馬ふと思ふも寄いづと申々れ沛曹司とて様の所へ鹿
通ふ鹿鹿の通ひ候世間ふ暖小成候へ草の深小卧んと
播磨の鹿へ丹波へ就世間とて寒あり作へるお金金んと
丹波の鹿へ播磨の印南野へ就作とて申々る沛曹司馬場とて
あれ鹿の通ふとて所と馬の通ふとて様や有さうは應く候
案内者せよと宣へい身へ年老て如何ふも叶ひ作すと申次
根汝ふ子へ無叶とあるへさん徳王とて生年十八歳ふ成る
小冠者成奉沛御曹司應く警とて取上とて給く父と警尾
庄司武久と云同あれは警尾之弟武久と名ふせて一谷乃
先歩せさせ案内者ふあを具せられとて平家亡び源氏の代に

成る後鎌倉殿と中違へる奥州へ下り討てあひ討警尾之弟
武久と名ふて一所ふ死々る兵と

山王祠 日莊坂村小ありあも亦丹生谷 府之井 社あり小あり

若一王子祠 日莊福地村小あり上梁文云永仁五年 相傳 東に源氏

八王子祠 日莊原村小あり上梁文云

白瀧辨財天祠 日村の里長栗花は氏の家園小あり

栗花落井 社あり小あり

の祖先山田郡司真備とて人治治慶帝の時朝廷ふ仕へ其頃獲

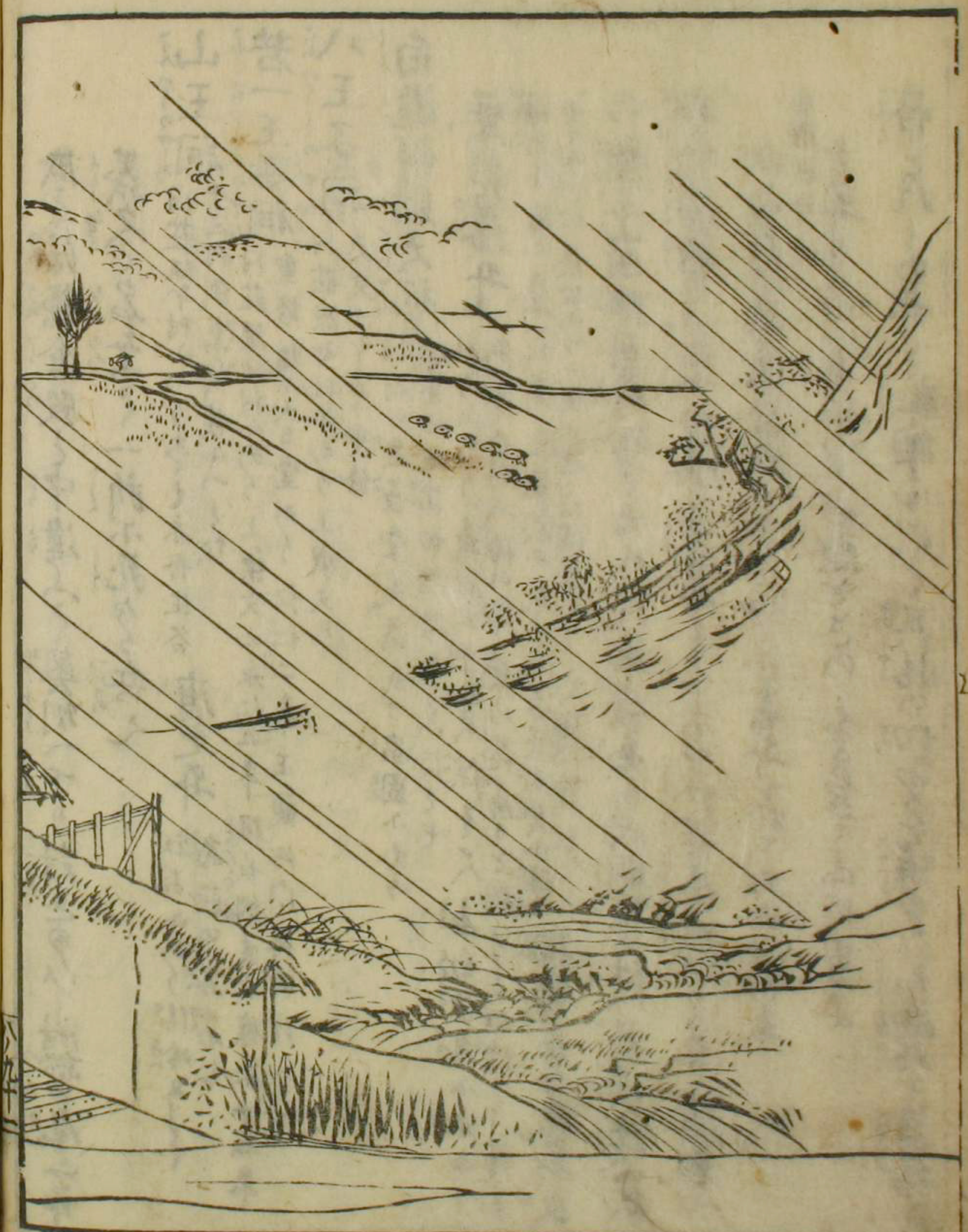
右大臣豊成との息女白瀧とて意慕ふふ末のみ錦本の教つるふの奥小

水毎月の編葉の落もあつふふ雲井とてあね白瀧の末

帝これのあを殿園の川と其頃の切あると様ふふ白瀧姫とて真備ふ

白瀧姫とて

爾雅曰五月梅欲
黃落則水潤土潤
柱礎皆汚矣蓋
成雨謂之梅雨
冊主山田原村栗たあ
氏のお蔵小入梅穴
あふぬ出さるる
風土の形といふ
べー系作を者
町の西名町といふ



丹生山田
 子年五



大岡の家
 丹生山田
 縮本氏の旧屋に住
 丹頂の鶴の棲く
 子年五と



天國の名叙を賜ふ賜ふる新く二家成さく白勝那一男子成
春と終ふ死ぬ其家の東境小葬とて廟塔と建たる小桑の花前
々々月あるれいい家あより名泉涌出る大徳小達一語有て白龍那
と多財大と崇め氏とあるた落とを賜ふる出生の子の成る後左門佐
真利と名なる殿后 為耶古ま丹生山田（り）の時の家た落井とく

丹生のふくをその花に喰ふたりつれて落る家た落の井あり

千年家 日莊衛系村頼本氏の家といふ近年まで保文ふ八同二年の文字ありし今
ふ千年をくありとて古代の家といふ谷小桑とて都て小中あり新々たりあり
これより西山道通の山中谷々の里より古た家た多し

谷法ふ小家の人や 菊 け 花

田福

義經椎木 同莊藍那村あり入はあり義経は小法とて陣とあり名と次相後と
藍名村あり軍蔵評定の所又高尾は水勝那の峠あり

攝津名所圖會

